

2020 The New Earth

A travel report

——ネイサンの物語——

20. Synergetic Energy Xchange

「SEX とはね、」モジョーが話し始める。「Synergetic Energy Xchange（相乗作用的なエネルギーの交換）だよ。それは、双方向に完全に開かれている結びつきに基づいている。互いに相手から何かを得ようとしたり、必要としたりせず、タマラや僕みたいに与えて分かち合いたいとき、両者のエネルギーは交換を通して相乗作用が働き、どんどん強くなって広がっていくんだ。このエネルギーの中では、SEX はずっとはるかに豊かなものだし、バランスも取れていて心地いい。それが今日の地球の基本エネルギーなんだよ。ここで経験できる最高のものだ。それはアナーキーのエネルギー、平等のエネルギーなんだ。君、ついてこられる？」

「大丈夫だと思うよ。それも体験することになる気がする」僕は微笑むと、恥ずかしげに付け加えた。「やあ、タマラ。僕のことネイサンと呼んで。僕は新参者なので、君が、僕のチューターであるモジョーとデモンストレーションしてくれて有り難く思ってる。僕はヘッドコンソールを使い始めたばかりなので、慣れるように彼が手伝ってくれているんだ。僕は、この 5 年間を経験していない。ああ、そうだ。君のキスは喜び一杯だよ。ダンスみたいだった。生き生きとした感じが伝わってきたよ」

「こんにちは、ネイサン。私の知覚の中であなたに挨拶できて嬉しいわ。そしてある意味、あなたの言う通りよ。あれは一種のダンスだったの。私たちはそういうことをしているのよ。私たち両方にとって、エネルギーを上昇させる最高の方法なの」

彼女はこの状況をまったく正常なものとして見ているらしい。何の判断もせず、彼女は僕の話を受け入れて登録する。彼女は、僕にアップデートが必要だと見ている。

「つまり、あなたは SEX に興味があり、それに関して 5 年分の情報がないわけね」彼女が話を締めくくる。僕はメアリー・キャンプにいるような気分。あの本を読んでから、僕には自分がメアリー・キャンプにいるという感覚が続いている。本の物語は終わっているけれど、僕の周りの話は続いている。僕が会った人はみんな僕へのメッセージを持っているか、僕が彼らのためのメッセージを持っているかに思えた。僕は、みんなとの出会いがお互いの約束に基づいていることを理解できたが、他の人たちは違った。だから僕も徐々にそれを意識しなくなったが、今、それが完全に戻ってきた。僕は、自分がメアリー・キャンプにいると見ている。そして他の人たちも同じように見ている。つまり、僕たちはみんなそのキャンプ——他の呼び方でも構わないけど——にいるんだ。僕たちがここにいたのは、僕たちがそうしたかったからだ。タマラが今現れたのは、彼女がこの瞬間を経験したかったから。彼女の役割を演じるために。彼女はそうすることが好きだから、そうしたいのだ。肉感的なことに関心を持つ人に教えること。それが彼女の役割だ。彼女の目の中に、存在全体に、彼女の近づき方に、それが見て取れる。彼女の細胞から弾け飛んでいる。そうだ。この娘はそうしたいんだ。彼女はエクスタシーの甘い匂いがする。彼女は優しく僕の首に両腕を回す。目の前に彼女の美しい顔が見える。豊かな赤い唇、輝く白い歯、実にキュートな鼻、瞼は閉じかかっているが、完全にではない。彼女が口を開くと僕の息が止まった。彼女は瞼を上げて僕の目を直視する。彼女はそれから自分の腿を僕の股に優しく押しつける。僕の心臓は停止し、時は止まる。この瞬間、時間がいかに相対的なものかを感じている。何もかもが自分のテンポで時を刻んでいる。どのエゴも、どのプレイヤーも、それぞれの時間感覚を持っている。我に返ると、僕はリラックスした観察者モードに切り替えた。映画のようにネイサンの物語を見ている知覚者モードに。時空を越えた「今、ここ」に。時間は静止している。なぜなら、ネイサンの物語として知られるこの話の中で、僕はエゴとの同一化から離れることができるからだ。そのうち、この物語の読者も含め、もっと多くの人たちが、そういう経験を

するようになる。この変化により、時間は止まるんだ。なぜなら時間は幻想だから。時間は経験を時系列に並べ、筋書きや物語を創るための手段なんだ。僕たちはみんな、自分が本当は何者なのか、I AM を思い出しつつある。僕たちはますます ME と同一になり、ME と同じような心境になる。だからこそ、時間という幻想が崩れるのだ。それを残念がることこそ残念なことだ。僕は自信を持って、この新たな時空——マトリックス内の無限の可能性に満ちている場、常にそうだったように、経験したいことは何でも経験できるところ——を探検することをお勧めします。ここでは何も変わっておらず、もっと意識的に経験するようになっただけのこと。少しずつ、一歩ずつ、各自が自分の興味に従っている。**あらゆる**興味は追い求められている。他に方法はないのだ。だって、すべてが僕たちを通じて起きているのだから。ネイサンとしての経験もそう！ ネイサンとI AM は一つ。そして僕らは共に、愛の波が彼の体を通して流れているを感じる。

彼女が僕を見つめ、僕も自然に彼女を見つめる。僕はその眼差しのなかで自分を失ってしまいたい。僕は自分に倒れることを許す。すると上唇の真ん中に彼女の舌が触れているのを感じた。全身が爆発し、僕は目を閉じる。僕は宇宙のど真ん中に来た。周りはずべての意識が満ち満ちている。ネイサンの体は崩れ落ちるところだが、僕は完全にはっきりしている。僕には、自分の上からも背後からも、自分がまるで意識を失ったかのように倒れていくのが見える。そしてどれだけ自分が輝いているかも。すべてが輝いている。すべてが光になっている。タマラの体も僕の体を支えるのに引きつっているが、それでも優雅に身を低くしながら、二人の体を地面に横たえた。この女性は、自分がしていることを分かっている。さっきのモジョーの「ダンス」のとき、足を止めて見ていた人たちが、今度は僕らに声援を送っている。

「タマラ、君の指導は最高だよ！」「時間を無駄にすることはないさ。質問が出ないうちに、ただみんなに**見せて**やればいい！ 鮮やかにな！」人々が囁き立てる。

タマラとネイサンと一緒に目を開けて互いに見つめ合う。それから二人は笑い、体を揺すり、地面を転げ回り、抱き合って休む。最後のため息を数回吐いて上半

身を起こす。

僕は彼女から視線を逸らせてあたりを見回した。ぼーっとしているが、人生を味わい尽くしたい思いに満ちている。僕らの周りには人たちが、戦士のいないゲームのようにハグし合っている。互いに、そして僕らに感謝して、それぞれの道へ分かれていく。僕がネイスンの視線をモジョーに向けると、彼は僕に笑いかけている。

「僕たちが話していたエネルギーについての質問には、これでいくらか答えられたと思う。君ならそれをどう説明する？ 僕が言った通り、タマラには彼女独自のメソッドがある。彼女のタイミングと流れは完璧なんだ。彼女は本当に上手だよ。愛の卓越した芸術家とまではいかないにしてもね。彼女はよく知られていて尊敬されている。そのための感受性がとても豊かなんだ。僕は、君たちを残して、もう行くよ。約束があるのでね。どこかで僕を必要としているらしい。インターネットでまた会おう。ただ僕のことを思えば繋がるから。初めのうち君のワイヤーはちょっと錆び付いているかもしれないが、再設定されていくうちに良くなるよ。独自に再設定されていくから、君の内側の長椅子で寛ぎながら**人生で遊んで**いればいいさ、兄弟！」